
瑠璃色の宇宙（そら）

紅碧

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

瑠璃色の宇宙^{ソラ}

【Nコード】

N8284Y

【作者名】

紅碧

【あらすじ】

両性体のエスパー天使族は外宇宙にむけて開発チームが創った実験体だった。失敗品の天使族の1人、シルバーは7歳のとき、連邦軍主席ジュニアであるブラックに引き取られる。ある日、海王星で1人の考古学者が行方不明になり、付近で、別の宇宙船も消失する。彼らは調査のため、海王星の衛星トリトンへと向かう。

西暦3077年6月地球

ラベンダーの花が咲いていた。
辺り一面に。

青みがかった董色の花が永遠に続くかと思われる。
花絨毯の甘く爽やかな薫り。

その向こう側に、轟音と共に、黒の戦闘宇宙船が現れた。
脇にZの金文字が刻まれている。

ほどなくして、ヘルメットと黒ずくめの戦闘服姿の長身の人影が、
ゆっくりと降り立つのに、少年は気づいた。

「きみ、名前は？」

落ち着いた深みのある低い声が頭上で響いた。

「シルバー。シルバー・アーク」

「アーク博士のお子さんだね」

男はヘルメットを取り去ると長目に伸びた漆黒の髪を振り払い、少年の光に煌めく髪を、かがんで指先にふれた。小麦色に日焼けした端正な横顔に、艶やかに伸びた漆黒の髪。逞しい体軀は自分よりもはるかに高かった。伶俐な美貌の青年の双眸は黄昏た空に似た深い
ラベンダーブルー
青紫。

それは底なしに深い海底を思わせる孤独をも感じさせた。

「綺麗な銀の髪だね。目は草原の色だ。おれはブラック・ハイト」

「ハイト？あなたがジュニア？連邦軍の黒豹？」

「そう呼ぶ人もいるな」

青年の切れ長の瑠璃色の瞳がやさしく微笑した。それは凍てつく真冬の空に思いがけなく現れた明るい陽だまりにも似ていた。見る者すべてを包みこむ暖かな日のひかり。

「シルバー、きみは大地を炎に包むことも緑の草原に蘇らせることもできる。きみはどちらを選ぶ？」

西暦3078年2月金星レダ平原607科学研究所

金星の砂漠はうすむらさきがかつた碧い闇につつまれていた。その中を無数の風塵が、ドームにおおいつくされた金星都市レダを襲っていく。この一刻後、激しい磁気嵐が過ぎる頃、私用宇宙艇Zは、黒塗りの機体を翻し、ここから、地球、火星と抜け、小惑星帯アステロイドベルト・ゼロ基地に向かう予定だ。

「ハイト司令。あなたが、その個体を消去せずに引き取られたと聞いたのですがいくつなのですか？その実験体は？」

「7歳です。今年の6月7日で8歳になります」

「女性？男性？」

「両性体の、天使族です。銀髪に緑色の目を持つ個体です」

腰まで伸びた黒髪を1つにたばねた、深い緋色のロングドレスに身を包む女性、朝霞野夜博士は、美しい黒目がちの大きな瞳を見開いた。

「あの個体群はすべてアルファ・ケンタウリの惑星開発隊に連れて行かれたものだと思っていました」

「純粹種の個体ではないのです。人間との混血で、サイコプラスターであるため、危険性を重視して、冥王星の私の屋敷から4月から、火星の訓練施設に通わせることにしました」

青年はこの2月14日で23歳になったばかり。長めに伸びた艶のある黒髪に小麦色の肌、長身のすらりとした体軀を黒一色のスーパースーツに包み込む、伶俐で端正な容姿と、切れあがった瑠璃色の双眸が印象的だった。ブラック・ハイトー高貴な黒という名を持つ彼は太陽系連邦軍の司令長官であり、連邦主席の息子 ジュニアだった。「連邦軍の黒豹」の異名をとる。

「父親はあのレッド・アーク博士の子なのです」

「アーク博士？では開発チームに連れて行かず、自分の子を置き去りにしたわけなのです」

「そうです。その子が抹殺される間際のところを私が主席に願い出て阻止しました。利用できる個体のみ残り失敗品の天使族たちを開発した博士もろとも辺境の地に追いやろうとした太陽系連邦軍の計画を、あなたはご存じかと思います。彼らは失敗品ではありません。あまりにも脅威だったので抹殺する。それは、失敗したからではなく統制の道を阻むから消去するという、我々人類のエゴです」

「どうなさるおつもりなのですか？国家の意思を壊した結果にもしなったら？理想は現実とは違う。お父上、太陽系連邦主席は以前、あなたにそうおっしゃられたと、主席御自身から私は聞きました。その個体の存在が、あなたの道を阻む結果にならなければいいのですが」

「そのような心配は無用です。私に道はありません。宇宙^{ユニバース}だけです。」

「そう言い放つとブラックは目の前のオリエンタルな美女と握手し、「では、また、母上」と会釈すると、部屋を立ち去った。

「母という名は捨てました。22年前に」
野夜は長い間その場所に佇み、窓から、砂嵐の中、飛び立つ宇宙船の黒壁に描かれたZの金文字をみつめていた。

西暦3086年1月小惑星帯準惑星ケレス、アステロイドベルト・ゼロ基

地太陽系惑星連合調査局

「彼はまだ15です。宇宙^{ユニバース}に出るには早すぎます」

「きみが宇宙に出たのはいくつだった？太陽系連合調査局長」

「14歳です」

「では早すぎるということはないだろう」

「ですが、、、」

「彼に関するきみの権限は、今はない。3年前君は太陽系連合軍（旧太陽系連邦軍）を自らの意志で退いた。それはきみ自身が納得しているはずだ」

「彼は戦闘を望んでいません」

「きみは誤解しているハイト局長。実験体の天使族に人権はないのだ」

天使は人にあらず。人類であるわれわれが30年前にそう定めただけだった。青年は目の前の立体映像の人物。太陽系連邦主席ロツク・ハイトの青いケープを見つめた。絹のコバルトブルーの布は頭から足先まですっぽりと覆われ、中の表情はおるか容姿すら想像できない。20年前流刑地木星が独立戦争を起こした際の戦いで、爆撃され頭部ごと吹っ飛ばされた主席は脳以外は機械のサイボーグだと聞く。

胸元には青い薔薇一輪。ゆえに彼は「連合軍（太陽系連合軍）の青薔薇」と異名をとる。

「おっしゃるとおりでした。申し訳ございません。主席」

「彼はきみのペットではないぞ、ブラック」

「は？」

「国いや、宇宙のものなのだ。実験体に、個人の自由はない」

「そういう人間的な感情は、あの実験体に対して、私は持ち合わせではありません、主席」

ブラックと名指しでよばれた青年は不快気に会釈すると、ホログラム（立体映像）スイッチを消した。艶やかな長めに伸びた黒髪を無造作に片手で振り払い、ダンヒルのライターでマルボロに火をつける。紫煙がゆっくりとあがるのを青みがかかった紫の切れあがった双眸で睨みつけた。

「ペットだとはずいぶんだな。親父らしい発想だ」

彼はクリスタルの灰皿で煙草を揉み消すと、踵を返して指令室を後

にした。

3086年7月火星 マーズ251シエイラ・エスパール訓練所

「今日のシミュレーションどうだった？シルバー」

夏の爽やかな風の中。空色の髪が脇でゆれる。腰まで伸びたストリートのは髪はスカイブルー。聖堂にいる天使のようなバラード・レインは、傍らの小柄でスリムな銀髪の少年の肩を小突いた。

「え？なに？」

「また聞いてなかったのかよ、おまえっていつもそう。シミュレーション試験どう？ってきいたんだよ。宇宙ソラにいつてそれだとすぐ敵に撃ち落とされるぞ」

「ごめん、聞いてなかった。たぶん落第だと思う。僕は実戦には向いてない」

エメラルドに煌めく双眸を一瞬翳らせ、シルバーは左手のプラチナ製のブレスレットを覗いた。

「今日、紅くれない・火星店でピアノ弾く？バラード」

「ああ、バイト入ってるから。今日もボーカルの奴、具合悪くてさ。代わりにおまえ、歌えるか？」

「うん」

「じゃ、たのむぜ。これ今日の分」

新緑の萌える街路樹の下、走り去る前にバラードに手渡されたのは一枚の譜面だった。

この6月で16歳になった少年シルバーは、冥王星のハイト邸から、火星のエスパール訓練所に8歳から通っている。同学年のバラードは、親友ともいえる空色の髪と瞳を持つ、シルバーと同様、天使族のエスパールだった。

天使族とは、30年前に太陽系連邦政府が極秘開発した実験体の両

性体エスパーで、傍目からは少年に見えるが半分は女性である。もともと恒星間宇宙飛行に耐えうる生命体を創る目的に遺伝子操作していたのだが、たまたま自然出産で生まれることもあり、シルバ―は、そのような、まれな天使族の1人、それも人間と天使族との混血だった。

このシェイラ研究所では、天使族、人間のエスパー、サイボーグの共生訓練施設があり、感情を持つ人型ロボットたちも多くが共存している。巨大ドームで覆われる砂漠の惑星火星はうすむらさきの夕闇の美しい人口都市だった。

（今日の仮バイトが終わったら、明日から長期休暇か）
冥王星のハイト氏の屋敷は我が家なのである。あしながおじさんともいえる、太陽系連邦主席の息子、ブラック・ハイトは3年前に太陽系連邦軍の司令から調査局へ移動し、多忙な日々を送る、シルバ―のいわば育ての親であり、保護者であった。

火星マーズ822パブレストラン・紅・くれない火星店

火星のパブレストラン・紅火星店は、主要都市マーズの中心部に位置する。おちついた淡い水色のライトの下。クリスタルのグラウンドピアノに座り、金色のウェーブの髪の白いドレス姿の天使が、メロディーを奏でていた。まだ開店時間1時間前だ。音合わせ中らしいメンバーはバラードのほかアコースティックギター担当のデイーンがいた。今日のバンドのメンバーは飛び入りのシルバー他は彼ら入れて3人らしい。毎回、奏でる曲によってポーカーとピアノ以外はメンバーが変わるのだそうだ。

「よ、早いじゃんロビン」

ロビンというのはシルバ―のバンドでの偽名である。代役で歌うのはこれが2度目。もちろん今日のバイト代は入ってくる条件だ。ピアノ弾きは、先ほど、学校で話したバラード・レインである。ア

「モンド型の実髪と同じセルリアンブルーの瞳を向け、「歌つてみて。帰り際に譜面わたしたでしょ」
とせかす。」

「まだまだよ。シヨーン（バラードの偽名）。まず、ひととおり譜面見て、頭にたたきこむから」

銀のドレス姿のシルバーはメイクし、グリーンカイツの髪をつけていたの
で、一見、誰とは見分けがつかない。今は金髪カイツのバラードとて同様
メイクのきつい二人は普段の見かけとは雲泥の差がある。

バイト禁止の寄宿生の規則違反だからなのだが、一般人に身元がばれるとまずいというのが真の理由ともいえる。

「穴あけないですんだ。サンキュー、ロビン」

脇でアコースティックギターを調整する茶髪のディーン・レイク（
こちらは本名）がウインクした。彼は天使ではなく、ただのエスパ
ーであるが二人の正体を知っている。

「これ3曲だけ歌えばいいの？ディーン」

「そうだよ。間奏が長いんだ。クラシックが基になったロックだからね」

「ふうん」

「バラードの作った歌を1発で歌えるやつそうそういないんだよ。
いつものやつ、無理だつてついに遁走しちゃつてさ」

「ディーン」バラードがあわてて制しようとするが間に合わない。

「えっ？そうなの？」

「ごめん。ついさつき連絡あつて、やめちゃったんだよ。本当に」

「それは大変だね」

「ずっと代役頼むつてのは無理だろ？」

エメラルドグリーンの髪と瞳の少年は譜面を見ながらちよつと考
えて、音合わせ中の二人に、困った表情を浮かべた。

「僕はいいんだけど。ブラックがどう言うかな」

「、、おまえ、なんだかんだいってやっぱ俺よりもジュニアが
いいんだな」

「彼は保護者だから」

「、、、そうか」

いや、違うね。内心バラードは気づいていた。

エスパーの能力封じ用ブレスレットの待ち受け画面に入れてあるプログラムは3055年2月14日というプロフィールともに、ある人物の端正な貌がぎざまれてある。そのことをクラスメイトで、親友のバラードはとっくにお見通しだった。

冥王星プラス・テラ328 - 57ハイト邸

「競い合うのは好きじゃない。ましてや殺しあいなど。絶対嫌です」

「そうだろうな」

ブラックは淡々と冷製パスタを食べ続ける。

「軍隊は嫌いです」

きっぱりといい放つシルバーに唐突に顔を上げ、ブラックは笑った。

「では俺と海王星に会い」

「ええ？」

「海王星で来週太陽系惑星連合のパーティーがある。お前は俺の婚約者、つまりパートナーとして出席するんだ」

「ブラック。正気なの？」

少年の顔は真っ赤になった。

「僕は天使族だよ」

(お前、俺よりもやっぱりジュニアがいいんだよなあ。)

一瞬、脳裏にバラードの苦笑と力ない声が浮かんだ。

「気がつかなかったのか？なぜ俺がお前を手元に置いてあるのか」

「僕が国家機密の実験体だから、メリットがあるから？だよな？」

少年は気づいた自分の真の気持ちと戦っていた。

「天使は人にあらず」

実父今は亡きアーク博士が研究のため多数の自分で創った天使族た

ちとともに、アルファケンタウリⅡ 恒星間宇宙飛行に旅立った最後の言葉が脳裏を過る。

「お前の心が俺は読めるんだけど」

サウスポーのブラックは右手の能力封じのブレスレットをかざした。「何するんだよ」

憤慨したシルバーをだきよせそのほつそりした肢体の背と銀の髪をなげた。

「俺はテレパシストのエンバスだから。実験体じゃないがエスパーの俺だって純粋な人間ではない。おまえが、ずっと好きだった。一生俺と一緒に宇宙にいてほしい」

「僕もそうだった。でも、15も年下なのに。それに天使族は両性体だし、天使同士じゃないと子供もめつたにできないし。いいのかな」

「いいんだ。それにおまえは厳密に言うと純粋な天使族じゃない。」

父親レッド・アーク博士は人間で、母親バイオレットが天使だから、いわば混血だろう？」

「それはそうだけど。このまま結婚するの？僕たち」

「将来はそうしてほしい。だが今はまだしない。18までは法律で禁じられてる。他を納得させるためにも、海王星には婚約者として出席してほしいんだ。でないと」

「でないと？おまえは軍に来年送られ、俺とは一生会えない」

「そんな、、、」

太陽系惑星連合に理不尽な怒りを覚えながらも記憶にある人物が思い浮かぶ。

婚約。

シルバーは、黒いストレートの髪をアップにした、スラリとした長身の美女を思い出した。均整のとれたプロポーションの金星レダ平原607科学研究所所長の朝霞野夜博士。シルバーの亡き実父、レッド・アーク博士の上司だったともきく。

「じゃ、あの記事は？」

「ん？」

「『宇宙速報』のネットチューブ。朝霞野夜博士との2ショット記事。金星科学研での」

宇宙新聞で2か月前騒がれたスクープ記事をシルバーは訓練施設でバリードからこっそりチューブを流してもらい、見知っていた。

「もしや恋人同士じゃないの？」

「それは絶対にありえん」

ブラックは、真顔で、シルバーの顔を覗きこんだ。

「実はな。朝霞博士は、俺の実の母上なのだ。だから恋愛対象にはならん。あれは仕事で金星研に出張した時の写真だ」

「ええっ？たしか亡くなっただけじゃなかったの？あなたが生まれただ後少しして」

「おまえの言う通り、事実上では母は死んだことになっている。だが、一般には公開されてないが、父と離縁した30年前に事故死し、サイボーグとしてよみがえった。だから2か月前の記事はデマだ」
固く抱きしめられた胸の中で、そう言い放ったのだった。
そうして男はゆっくりとシルバーと唇を重ね合わせた。

ハイト邸にて翌朝

「坊ちやま、おはようございます」

おちついたテノール質の声がドア越しにノックとともに聞こえる。

「レオン？」

「そうでございます。坊ちやま、ドアをお開けしてもよろしいですか？」

「うん」

ボタンと勢いよく開けられたドアから、長身の肩までブロンドの美青年が入ってきた。なんと白エプロン黒いメイド服である。

「、、、レオン。なに、その格好」

「おはようございます。坊ちやま」

会釈する25歳くらいの若者にシルバーは眠たげだ。窓カーテン越しの日差しがまぶしい。

「おはよう。レオン。いつ犬からメイドになったの？」

「今朝からでございます。執事の服があきたので」

「ブラックが見たら、また怒るよ。気短かだから」

「もうとつくにお仕事に行かれました。坊ちやま、服を着てください」

シルバーはあわてて真っ赤になり、脇にかけてある服を手を取った。「旦那様から、言付かってまして。あと5日間でこれをマスターするようにと」

レオンはシルバーに、「社交ダンスのマスタープログラム」のソフトを手渡した。

「だからこれなの？」

手にとった服は、昨日までのカジュアルな服とは打って変わった、ピンク色のドレスであった。

「はい。ハイヒールもございます」

「レオン、ブラックから僕たちのこと聞いた？」

「昨夜遅く、いつもどおりに犬舎（サイボーグ犬宿舎）に帰宅する際に聞いております」

「でもちつとも驚かないんだね。僕が夜、ブラックの寝室で眠ってたのを知っても」

先程まで、毛布にくるまっただまま顔だけ出している自分の裸を判別できたのは、レオンが透視する目を持つサイボーグだからだ。なぜなのか、理由に気づいても、きっとレオンは無表情に違いない。

「どうかなさいましたか？お加減でも悪いのでは？」

「なんでもない」

二人が一つになったベッドを目にしても、サイボーグは顔色一つ変えなかった。

昨夜のことは、シルバーにとっては初めてのことだったが、ブラッ

クにはエンバス（苦痛を遮断する超能力治療）の力があり、苦痛は
なく幸福だった。

天使族の下半身は女性なので人間の男性との営みも可能だが、普通、
結婚までは考える者はそうそう滅多にいない。もと犬のレオンにと
っては別に衝撃的ではなかったのだろう。

天使族同士の場合は18歳前後になると成熟するため、婚姻を決め
た時点で、本人の意思次第で、どちらかが女性もしくは男性に変化
する。このままブラックと恋人同士であれば、シルバーは18歳に
はおそらく上半身も自然に女性に変化するのだろう。だが、人間と
天使の間に子供が生まれるのは、本当にごく稀まれのことだ。シルバー
は混血児なので、どうなるか実際はわからないが。

「レオン、僕たちが結婚したら、居づらくない？ここに。ごめんね」
「坊ちやま、なぜそんなことをおっしゃるのですか？私は犬ですか
ら。人間のあなたがたの気持ちはわかりません。ただお仕えするの
みです」

ソフトなブラウンのレオンの瞳はやさしかった。

レオンの本名はレオンハルト。10年ほど太陽系連邦軍（現太陽系
連合軍）の極秘任務にサイボーグ犬として所属勤務したのち、ハイ
ト家の執事として、この家の真の当主ロック・ハイトに約30年前
に雇われたのだった。青年執事は、脳のみ犬のサイボーグ犬であり、
命じられれば金色の鬘たてがみを持つ黒いドーベルマンに変身する。軍費用
に開発されたサイボーグ犬なのだが、フリスビーなども得意で人懐
っこいので養子になった当初幼いシルバーの格好の遊び相手でもあ
った。製造されて40年目のヒューマノイドの彼は、見た目も人工
皮膚の接触感も普通の人間の美青年と全く変わらない。家事もこな
し、執事としても優秀で護衛用も兼ねてハイト家に30年前から雇
われている。訓練施設から帰宅後の養育係兼教育係でもあり、それ
は16歳になってもシルバーにとって、もう一人の大切な保護者

家族でもあった。

海王星ネプチューン2248ホテルマーメイド

一週間後、豪華宇宙船で行われたパーティー会場で太陽系連合主席の息子^{ジュニア} 調査局局長の婚約者として紹介されたシルバーは、2ショットの記者会見もそこに、ビップ専用の黒塗りの飛行型ベンツでホテルへと向かった。海王星ネプチューン2248ホテルマーメイドである。

「明日は海王星でのおまえの初仕事になる」

「初仕事？なにそれ？」

これから婚約旅行じゃないの？もう訓練校にももどらなくていいし、来年入る予定だった軍隊にも入隊しないでいいかわりに調査局員になるということは聞いたが、まさか明日からは、。

「さっきダンスした足がとつても痛いんだけど」

「歩けなければスカイカーもあるし、おまえはレポートという手があるじゃないか」

「ちがう」（婚約旅行だつて言うから喜んでたのに）

「不満を言うな。宇宙に放り出すぞ。捨てるぞ」

このあいだは真逆のこと言ってたくせに。もう変わってる。気分屋なんだから。

だがお互いの左手の薬指につけられたプラチナのリングを見て、彼は、ま、いいか、と微笑んだ。

夜の街明かりを眼下空中に浮遊するチューブの高速道路を滑るように車は飛行していった。

海王星ネプチューン2248ホテルマーメイド

「レオンはこの仕事中は冥王星の屋敷で待機してもらっている。何かあったらかけつけるようにことづけてある」

「そうなんだ。さびしくないかな」

「軍用犬サイボーグはそういう感情は持ち合わせていない。あいつの脳は犬それもきちんとした感情操作済みのものだ」

レオンは感情が表に出ない。だが、ときおりあの深い琥珀色の双眸が物憂げに翳るのをシルバーは知っている。

「ときどきホログラムで話すね」

「ま、そのほうがあいつも喜ぶだろうな。犬だからだが、はたしてそうなのだろうか。」

レオン・レオンハルトは本当に犬なのだろうか。

火星マズ822パブレストラン紅・火星店

二人は紅・火星店の床に座り込んでいた。店のマスターはまだこない。

「どうする、バラード」

「どうするってディーン、どうしようもないだろ」

バラードはピアノの調律をしながらアコギの弦調整をするディーンを振り返った。

「連邦の黒豹と婚約して海王星にいつちまったんだから。インディーズ売上ナンバーワンでも戻ってこないさ」

「ジュニア、最初からそういう目的であいつを拾ったのかな？ シルバーは16だと未成年だから犯罪スレスレ」

「こら言葉に気をつける。司令は31だから15くらいの年の差カツプルは巻じゃいくらでもいるさ」

シルバーが代役で歌った3曲を録音してあるデジタルレコード会社に、バラードがリーダーをつとめるバンド「コスモス」の新曲として持って行ったところ、大受けて、なんと3000万枚も太陽系内

で売れたのだ。しかも、顔も名前も別人で緑色の髪と瞳の謎のボーカルビジュアル系美少年「ロビン」と名付けられている。

「巷じゃ人外の声とかって言われてるらしい。歌聴いたやつが何人も倒れたとか失神したとか」

「店でも代役たのんだ日はぶっ倒れた客何人かいたけどあれってただ酔っぱらってつぶれたわけじゃなかったんだな」

「訓練施設を12歳で一喝するだけでふつとばしたやつだからなあ」「あ、俺も覚えてる。あれはすごかった。高等部だった俺でも驚いたからなあ。1週間の謹慎うけてたな。あれからブレスレットはずせなくなっただったって？」

「能力封じのな。どこまで効いてるかわからないけど。あれだけ綺麗で天然なんだけど、ちからの加減だけはわからないやつだからなあ」

「やっぱジュニアしかいないでしょ。あいつ操縦できるのは」

「ホント。軍に入らなくて正解だと思うよ。敵味方の区別つかないんだもん、シルバーって」

「会社の社長になんて言う？」

「次の新曲に時間かかるからそれまで待ってもらっしかないだろ？今は体調くずして入院中とかごまかしてコンサートも写真撮影もファン交流も一切なし。幻のビジュアル系ロックバンドってことではないんじゃない」

「店で2回分撮ったのを立体DVDにして売って社長が言ってた」「おれも巷からはしばらく姿を消そう。こそこそそのバイトだけのみじめな学生にもどるわ、新曲できるまでは。利益分は1/3はハイト邸に俺から届けておく」

「サンキュー、バラード。俺はいつもここでギター弾いてるから年上のデーンは学生ではなく、この店の従業員なのである。」

海王星ネプチューン2248ホテルマーメイド

「坊ちやま」

その夜、レオンから通信が入ったので、ホログラムに映すと、大変な怒りをあらわにしている。

「なんで怒ってるの？」

普段、ポーカーフェイスのレオンが怒ることはめつたにない。

「さきほど、バラード・レインという金髪の不良が、あなたさまに報酬だとかいうお金をおいていきました」

「、、、うつわ」

「バンドはあれほどダメだといったのに。退学になりますよ」

「もう訓練所にはどちらにしてももどれないよ」

「この緑色のとんでもないお写真は、あなた様でございますよね？
だんな様にもファイルにしてお送りしておきました」

何枚か、バイトのステージで歌った時の、ビジュアル系の化粧をし
っかりとほどこしたシルバーの緑色の長い髪と銀のドレス姿が映っ
ている。

「あーまた。きれいだろうなあ。こういうの、ブラックきらいだか
ら。でもレオンだってメイド服着ることあるじゃん。人のこと言え
ないよ」

「私の場合はもう一つの仕事着ですし、公の場では決して人様の目
にさらすことなどございませぬ。ましてや商業目的なぞ、、、」

「そんなおおげさな」
レオンは茶の瞳でまっすぐに目の前の主人を見つめた。今日は執事
らしくスーツだが、色は深いワインレッドである。だが金髪の眉目
秀麗のレオンにはふさわしい。

「メイド服よりも今日のレオンの方がきまってるよ」

「私のことはどうでもいいんです。坊ちやま、旦那様がなぜ、3年
前、2983年に軍をおやめになられたのか、おわかりになります
か？」

「戦いくさが向かないから、クビになっただって言ってたけど」

「あなた様のタメなのですよ」

「僕のタメ？」

「今のだんなさまは戦わずして治める宇宙を目指されておられます。あなた様も、パートナーなんですから、もっとしっかりなさってください。明日、私もそちらにうかがいます」

「ええっ？ハイト邸の留守番はどうなるの？」

「アンドロイドのトビーにたのんであります」

「、、、。まあ、トビーはしっかりはしてるけど、、、でもなんで急に」

「だんなさまの命令ですから」

そういうやいなやブツリと通信は途絶えた。

キレた。サイボーグ犬でもキレるときがあるのか。でも報酬って、、どれくらいあったんだろう。臨時でも貴重なバイト代なのに。レオン返してくれ。

「どした？眠れないのか？」

ダブルベッドの傍らで大いびきをかいて寝てたはずのブラックが覗きこむ。

「ごめん起こした？レオンがホログラムで、、」

といった途中で、また寝息をたてて眠ってしまった彼に、疲れてるんじゃない、、ま、いいかとシルバーも眠りについた。

海王星衛星トリトンアトランティス第2遺跡

海王星衛星トリトンにあるアトランティス第2遺跡に、高速チューブ内を、ブラックとシルバーは飛行艇エバーグリーンで向かっていた。トリトンは逆行公転回転軌道を持つ海王星の衛星で、それゆえ、海王星との潮汐力の作用のためトリトンの公転にブレーキがかかり、海王星に墜落する恐れがあるため、150年前にこの高速チューブで繋ぐと同時に補強工事が行われた。どちらも支障なきよう、強化

柱プラス太陽系連合政府の公道でしつかりとささえられている。
海王星はかつてはメタンの凍った海に覆われた、未開の惑星だった。
深いドームで覆われた龍宮とも言える海底都市に人々は生息してい
る。

すんなり主席がいきなり昨日、婚約会見した二人の動向を黙認した
わけではない。太陽系連邦中にスクープとして広まったため、二人
は仕事もかねてしばらく海王星付近に潜伏することとなった。

「君たちのこれからの行動如何により私の決断がくだされるからそ
う思っていてほしい。この事項の調査に全力を注いで解決に挑んで
くれ」

いつもながらに公の指示以外はブラックにくだされる青薔薇の言葉
はわかりにくく不快だ。

能力の調整ができないサイコプラスターとしては落第生のシルバー
を軍関係に置くことを断固阻止するブラックに対し、調査局ならき
ちんと使えるのかと言われればそうでもない。結局見張り役として
徹するしかないのだが、。

「もったいない。力の持ち腐れはさせないぞ」

「言ってる意味わからない」

「とにかく海王星の不穏分子を探し出すのが今回のおまえと俺の仕
事だ。うまくいけば、このままお咎めにはならない」

「僕らはなにも悪いことしてないよ」

「それはおまえ個人と俺個人の考えであって公では認められてない
んだぞ」

「不穏分子ってどうやって探し出すの？」

「海王星の衛星トリトンの海底に沈むアトランティス第2遺跡を知
っているか？」

「うん。たしか一カ月前、考古学者が1人行方不明になったよね」

「1週間前、彼はタイムワープして過去に飛んで帰ってきたという
話だ」

「それはすごい。ほんとなの？」

「14000年ほど前の過去に飛び、そこでトラブルにあり、意識だけ帰還してきたんだ」

「意識だけ？それってテレパシーだけってこと？」

「彼のテレパシーを覚醒させることが俺とおまえたたちの最初の仕事だ」

「おまえたちって、、ほかにもだれかここに来るの？」

「バラード・レインとレオンもよんでおいた。あとディーンもくる」

「わかったけど覚醒させてからどうするの？行くの？アトランティスに」

「そのとおりだ」

「どうやって？」

「このエバーグリーン号のコクピット内にタイムワープ機をセットした。考古学者アレン・ハイバー博士が発明したものだ」

「まだ覚醒してもないのにどうやって聞き出したの？」

「博士の帰還してきたテレパシー通信から、彼の自宅に予備のワープ機がもう1台あったので、拝借した。覚醒した博士には操作と道案内を依頼してある」

「でもテレパシーだけで体ないんでしょ？向こう（過去）で殺されたとか、、」

「そうだ。不穏分子が彼と一緒に逃亡し、その後、消去されたらしい。博士の思考は覚醒後、彼の子に引き継がれる予定だ」

「お子さんがいるの？」

「おまえと同じように自然出産で生まれた天使族だ。ラメールという。だが博士が極秘にして登録しなかったため、おまえのように生まれた直後に実験施設に送られることはなかったそうだ」

「ラメール。フランス語で、海ってという意味だね」

「この先の遺跡の入り口で待っているはずだ」

ごく、まれに、遺伝子操作しなくとも、自然に生れ出る天使族もいる。エスパーのように、そういう天使族も増えつつあると聞く。

音速で走る飛行艇の目の前の高速チューブ外に、さまざまな色の魚

たちが流れて見える。深いセルリアンブルーと淡いライムグリーン、ターコイズブルー、プルシアンブルー、そしてラベンダーブルーの水の奥に何かが、一瞬、よぎった。

「、、、人魚？」

「ん？」脇で飛行艇を操縦するブラックが振り返る。

「どした？シルバー」

「ブラック、今、一瞬、管制塔の向こうに人魚が見えたんだけど、、、」

「人工魚以外はこの海にはいないはずだ。偽物の見世物用の魚だからな。見間違えだろ」

一瞬、白い中央塔の向こう側に、青緑色の長い髪の少女が見えたのは、気のせいだろうか。たしかに下半身は魚だった。その冷たく碧く深い瞳はとても悲しげでそして美しかった。

あれは、、、？

ナスカの「ハチドリ」だ。

なぜ、こんなところに。ここは地球じゃないのに。

太陽系連合調査局に保管されている記録データ庫内に、「アルファ・ケンタウリに、地球そっくりの惑星がある」と、レッド・アーク博士から送られてきた最後の通信に記されている。9年前の話だ。

アーク博士は通信に1枚の画像を送り込んできた。それが、地球にある程度破損したとはいえ、太陽系で保護されている遺産の1つ「地球のナスカの地上絵」だ。ペルーと呼ばれていた砂漠地帯に広がる巨大図は、3086年現在、ハチドリとクジラしか残されていない。

昨夜の夢に現れたナスカのハチドリは何を意味するのか。彼らは海王星の衛星トリトンへと小型飛行艇エバーグリーンで海底チューブで向かっていた。シルバーはトリトンにあるアトランティス第2遺

跡で、アレン・ハイバー博士の遺された思念と対面する予定だ。衛星トリトンと海王星はチューブでつながっている。宇宙空間に巨大な水族館の道をつけたような高速チューブは宇宙船で移動するよりも早く、安全だ。

海王星衛星トリトン、アトランティス第2遺跡

鍾乳洞に囲まれたアトランティス第2遺跡博物館の入り口に彼らは降り立った。回廊の奥へと続く壁画は、古代マヤやインカ、アステカ文明の象形文字に覆われている。

「ここだ」

地面に描かれた方位塵の図面を指差しブラックが振り返る。

「司令、これが入り口ですか？」

トリトンの関門で合流した小型艇に乗っていたディーン、バラード、レオン。彼らは恋人であるシルバーと、旦那様と呼ぶハイト邸の執事レオン以外は、かつては太陽系連邦軍にいたため、ブラックをいまだにそう呼ぶ。

「そうだ。バラード、きみはシルバーとともにこの方位塵の中央でアレン・ハイバー博士の残留思念を呼び覚ましてほしい。そうするとラメールもここに現れる」

「了解」

バラードは空色の長い髪を翻し、方位塵の真ん中に立った。

「ラメールもこの図面の奥にいるの？ブラック」

「そうだ。シルバー、できるな？」

ブラックの切れ長の瑠璃の双眸が煌めいた。

ハイバー博士の残留思念は、5分ほど念じただけで虹色の球体になり目の前に現れた。

（まさか海王星衛星トリトンで、イタコさんのマネをさせられると

は思わなかった)

シルバーはバラードとつないでいた両手を離すと、球体に向かい、話しかけた。

「あなたの体は存在しませんが、僕たちとの会話は可能ですか？」
次の瞬間、目の前に、淡いライムグリーンとブルーの光が浮かび上がり、虹色の球体をつつみこむと、1人の人間の形を現した。

肩から腰にかけてまっすぐに伸ばしたターコイズブルーの髪に褐色の肌、髪と同色の大きくはつきりとした青緑の双眸。すんなりと伸びたながい手足の美少年？いや美女か？年は18くらいに見える。

「あなたが、アレン・ハイバー博士？」

シルバーは驚愕した。目の前の人物は先ほど、自分が、ここに向かう途中、高速チューブ内のつくりものの海で見かけた、人魚と瓜二つだったからだ。

「いえ、アレン・ハイバーは、父です。僕は彼の実子、ラメール・ハイバーです。父とはシンクロしました」

「シンクロ？」

「父の意識は僕の中に融合しているのです」

海の色髪と瞳の人魚に似た、新たな天使を目の前にし、彼らは啞然としながらも、次の目的に向かって、シルバーは言葉を続ける。

「僕はシルバー・アーク。となりのバラード・レインとともに天使族です。お願いします。お父上はどこからこの時代の宇宙に戻られたのか。道案内をしていただけませんか？」

「わかりました。こちらこそ、よろしくお願いします。この宇宙全体の未来の運命がかかっていることなのです」

「この宇宙全体の未来の運命？」

シルバーは訝しみ、顔色を失った。

「時間軸と次元軸の空間のゆがみが生じたためです。このままいくとこの宇宙は崩壊します」

ラメールは、おごそかに宣言すると、5人を見つめた。

アレン・ハイバー博士はラメールと親子であった。人間と天使族の婚姻は通常子供はできないはずだったが、突然変異的なものだったらしい。

それはシルバーのケースにも言えることだが。

「父、ハイバー博士は消滅したけど、今でも僕の中に生き続けている。彼は今でも僕とシンクロしている。君は連邦の黒豹と^{ジュニア}婚約中なんだって？彼と恋人にしてはいつも影に隠れてる感じだね。でもそれじゃいけないよ、シルバー。パートナーだったら彼と対等にならなくちゃ。彼を支える立場にならなくてはだめだよ」

「支える立場、、、」

「ジュニアは15も年上だけどいずれ、君の力が必要になるときにくる。きっと」

ラメールは褐色の美貌をこちらに向け、ターコイズブルー（青碧色）の双眸でシルバーを見つめた。同じ天使族なのにどうしてこうも違うのか。

「卑屈になることはない。もっと自分に自信を持つてもいい」

昨夜、そうブラックが言っていた。はずなのに。二人が一つになっただけだ。

「僕は自分のチカラをコントロールすらできない、だから能力封じのプレスレットも外せない。そういう奴がジュニアのパートナーにふさわしいと思うのか」

「ふさわしいとかそういうのは問題じゃない。自分の意識の問題だよ。主席のジュニアであるブラック・ハイトは、この太陽系をいざれ支配する人だ。君は天使族として生きるのか、将来、主席となるであろう彼のパートナーとして一生を終えるのか、いずれは選択するんだろうけどね」

「えっ？どついう意味？」

「シルバー、君は僕と同じ天使なんだ。それをいつも忘れないように」

「ラメール、、、？」

自分のふがいなさに落ち込む間もなく、飛行艇はアルファケンタウリへとタイムワープした。

太陽系が定めた掟は「天使は人にあらず。それは宇宙^{そら}全体のもの」だ。しかしシルバー、おまえはそうなるまい。お前はエスパーでも人間でもなく、男でも女でも天使でもなく、己自身として生きよー果てしなく深い暗黒というよりはむしろ青みがかつた瑠璃紺に近い宇宙の闇を前にして、9年前、7歳の時に旅立って消息を絶つた父レッド・アーク博士の、太陽系連合に、ではなく、自分だけに極秘に送られた最後の通信（言葉）が脳裏に響き、消えた。

アルファケンタウリ第3惑星テトラ、中央都市ナスカ頭上、飛行艇エバーグリーンコクピット

無数の星の煌めきが彼らの頭上の舷窓に流れていく。

恒星間宇宙飛行とタイムトンネルを同時に抜けるため、ワープするのに多少の時間はかかる。

この光の帯を抜けると、次元の輪をくぐりぬけ、太古のアルファケンタウリへと到着するはずだ。無限の星たちがぐるぐると旋回し、目の前にいきなり大地が現れた。

「夜だ」

バラードが身を乗り出して眼下を指差した。もちろん外気にはふれられない。小型飛行艇から宇宙船に瞬時に進化をとげたエバーグリーンは、はるか降方に広がるきらびやかな都市の灯りをめざし飛び続けた。

「あれは、、、あの形は、、、！」

シルバーが皆を振り返り叫んだ。

「ナスカの八チドリだ。あの都市の形は、地球の南米ナスカの巨大図、八チドリの形をしている！」

それは黒い闇に浮かびあがる陽炎のように美しい緑色の光に包まれた近代都市だった。

「だがあれは我々の知るナスカじゃない。この惑星はもうひとつの地球なんだ。」

ブラックが背後の操縦席から、低く呟いた。

次の瞬間、ズシンという鈍い振動とともに、飛行艇が大きく左に傾いた。

（何事か？シルバー）

（攻撃を受けたみたいだね、ブラック）

シルバーは夜闇にボウツと浮かび上がるライムグリーンの都市を見下ろし、透視したが、「違う。彼らは気づいてない。静かだよ」といぶかしむ。

「レオンがいません、司令」

傾き減速降下中の飛行艇の操縦パネル前のバラードが、運転席のブラックを振り返る。

「レオン？」

いきなりシルバーが駆け出した。コクピットから姿を消す。どうもエネルギー庫へ向かうらしい。

「おい、待て。行くな」

ブラックが顔色をなくし叫んだ。

「司令？」

バラードの後方に座るディーンが覗きこむ。

「どうしたんですか？真つ青ですよ」

操縦席のパネルを信じられないほど高速で打ち込んだ後、ブラックはバラード、ディーン、二人を前に困惑の表情を浮かべた。

「すまない。ちょっと席をはずす。すぐに戻る。あとはよろしく頼む」

「ラジャー（了解）」

そう答えながらも、ディーンは腑に落ちなかった。

普段、冷静沈着の司令らしくない。血相変えて出ていくとは。それも危ういコクピットを放り出すなんて。

「婚約中だからさ、まったく」

バラードが険しい表情でディーンのとなりに座るとブラックと同じ操作を始めた。

「連邦軍の黒豹もおちたもんだ」

「こんな時に、ヤキモチはよくないよ、バラード」

パネル操作の手は動かしつつ、ディーンが諫めた。

エバーグリーンエネルギー庫

エネルギー庫が炎に包まれている。

炎上する向こう側のドアが開かれ、向こう側に宇宙空間が広がる。

碧い闇に煌めく無数の星雲たちが見える。

「レオン？」

シルバーが炎のなかを透視すると、黒い大型のドーベルマンの姿が現れた。40kgのしなやかな獣の背の金色の鬣が、炎風に揺れる。背中から原子銃を発射し、消火に努めるがうまくいかないらしい。

「坊ちやま」

気がついたのか、犬の姿でレオンは銀髪の少年に駆け寄った。

「戦闘モード犬に変身したということは、敵がいるのか」

「あそこです」

レオンの黒い鼻先が示す方向に、目を向けたシルバーはターコイズブルーの冷たい双眸にくぎ付けになった。

「、、、君は、、、ラメール。なぜ？」

「僕は太陽系連合に対する反乱軍の天使たちの仲間なんだ。シルバー、天使として自覚めた時は、僕を思い出してほしい。僕は龍宮へ

戻る」

「龍宮？」

「海底都市レムリアーナで待っている。シルバー」

青緑色の長い髪をかきあげ、ラメールは凍てついた表情を浮かべたまま、こちらに向け右手をかざした。

「レオンどけっ！」

渾身の力をふりしぼり、ドーベルマンを念爆移動した次の瞬間、ドアの向こう側の小宇宙たちが無限大の数となり、こちらに向かってくるのを最後に、シルバーの意識は掻き消えてしまった。

エバーグリーン通路

「この駄犬があ！主人に助けられるとはどういうことだ？逆だろうが！」

人間の姿に戻ったレオンはブラックに罵倒され、打ちひしがれている。ラメール・ハイバーがエネルギー庫のドア向こうの闇の中に消えた後、気を失ったシルバーを背に乗せたところで、ブラックとはちあつたのだ。

「申し訳ございません」

いつもにも増して鬼の形相の大主人の怒りを感じるしっぽを丸めた犬同然のレオン。だが、やはりシルバーのことが心配なのか真つ青である。

「レオン、そこをどけ。エネルギー庫の火は消したのか？」

「消火いたしました、だんなさま」

通路に横たわったシルバーの胸に耳をあてた。

「意識を呼び戻す」とブラックは少年の身体を半分起こし、抱き寄せた。

「だんなさま、コクピットに御戻りになられた方が、」

「だめだ、間に合わん！」

エンバス（超能力治療）のブラックは意識を呼び戻すため、口づけるとその肢体を抱きしめたまま、心の奥に強く語りかけた。

（戻ってこい。こちらへ。暗闇に沈み込むな。はやく上がってこい）
エンバスは自分の命を削りながら相手の身体を治療する。レオンはシルバーの身体を気遣うと同時にブラックをも案じた。

「だんなさま、救命措置も私は装備しています。用意いたしております。けしてご無理はなさらぬように」

そこでレオンは蒼白になったブラックの意識を感じ、衝撃を受けたのだ。

（おまえが生き返るなら俺は死んでもいい。戻ってこい。シルバー）

エバーグリーン医療レベルBルーム2

「ブラックは？」

コクピットの隣の医療ルームでシルバーは目覚めた。

ほんの15分程度のことだったが、一度、死んでいたらしい。

「お疲れになったそうで、お休みになられています」

大きくエメラルドの双眸を見開き、かなりショックを受けたのか少年の顔は紙のように白くなった。

「あの力を使っただね。僕を助けるために。ブラックの身体は大丈夫なの？」

「大丈夫でございます。一時昏睡状態だったのですが、今は普通の眠りにつかれております」

レオンはシルバーの手をつかむと、取りすがり、涙ぐんだ。

「坊ちやま、私のために、、、だんなさままで巻き添えになられて本当に申し訳ございません」

「レオン、あやまらないで。それはありがとうだろ？レオンこそ、僕をブラックのところまで運んでくれてありがとう」

ベッドから起き上がると、少年はリラックススーツからスペースス

ーツに着替えた。

「あ、まだお休みになってください」

「バロードとディーンが困ってると思うんだ。裏切ったラメールは逃亡中だし、、、。もう大丈夫だよ。もどってきたから。でもその前にブラックを見てくる。彼が一番心配だから」

「っこりと微笑する天使の貌にレオンはホツとし、心に誓うのだった。

（坊ちやま。私はあなたのしもべです。死ぬまであなただけのしもべとなります）

エバーグリーン医療レベルAルーム1

「ブラック、ごめんね」

少年は泣いていた。ああこれは。あのときと同じじゃないか。アルファケンタウリに旅だった父と別れて、研究施設からハイト邸に来て少したった12歳の頃、上級生たちとのちよつとした争いがもとで、訓練施設を念爆破してしまい、その衝撃で眠ってしまったときと。そのときもたしか目覚めさせてくれたのは、ブラックだった。二人の能力封じのプレスレットを、もつと強力なタイプにつけかえさせられたのも、その時から。

「いや泣く子とはない。俺もおまえも無事だった。だからこれでいいんだ。だが、この次からは、無鉄砲な動きはやめてほしい。まず、俺に言うてからにしてくれ」

「わかった。ごめんね。これから気をつける」

（このセリフ。なんて聞いたかな）

心の中で苦笑するブラックは顔色は悪いがだいぶ、落ち着いてきたようで、点滴はつけたままだが、半分起き上がり、新聞を読んでいた。

「病人てわけじゃないから、あと1時間ほどで、コクピットに戻る。

ラメールはどこに消えたのか、目星はついたのか？」

「海底都市レムリアーナに行くそうだ。僕が天使として目覚めたら思い出してほしいとも言っていた。どういう意味かな？」

「さあ。俺は天使族じゃないから、わからんが。海底都市レムリアーナに不穏分子たちも隠れているかもしれん。とにかく行ってみよう」

エバーグリーンコンパートメントルーム2

バラード、デイーンと打ち合わせした後、まだ本調子でないため、休憩室兼コンパートメントでまだ少しシルバーは休んでいた。彼は犬に還ったレオンをかたわらに抱きよせながらほおずりすると心にテレパシーを送った。サイボーグ犬だがテレパスとして訓練されている軍用犬なのでキャッチできるのだ。

(ラメールはよびださなければよかったかな?)

(あの人物は、こちらの世界の鍵を握る重要人物です。坊ちやまはだんなさまの指示に従っただけなのですから、おちこむことはありません。少なくとも私ほどの失態ではありませんから)

(失態とかそういうことじゃなくて、彼は天使と人間の混血だろ? 僕も父が人間。母が天使族の混血だから、彼が不穏分子とかかわっていたとしてもその気持ちかわからないわけでもない。天使は人間にあらず。そう定められているからね。天使族たちが過去に逃げ込んで反乱軍を立ち上げても仕方ないのかも)

(、、、坊ちやま、、、?)

「心配しなくても大丈夫だよ。僕は人間を、ブラックをととも愛してるから。あの人以上に結婚することは考えられない。僕が目指したいことは、天使と人間とエスパーとそしてレオン、君のようなサイボーグやロボットとの共存できる宇宙を創ることなんだ。でもこのままじゃ無理だな。今の僕はあの人のお荷物にすぎない。このま

まじやきつとダメだ」

呻くように口に出して、少年は顔を両手で覆った。

「無理ではありませんよ。あなたならきつとできます」

レオンの茶の双眸がやさしかった。そしてレオンは人間の姿に戻ると心細げな少年のほっそりとした白い肢体を抱き寄せた。

「私はあなたのもべです。これからもずっと。一生あなただけのしもべです。私が一生そばにいてあなたをお助けいたしますから」

「そういう意味じゃないんだけど。でもうれしいよ、レオン。気持ちだけでも」

シルバーは青年の姿に還ったサイボーグ執事を抱きしめた。そのときのレオンの表情をシルバーは知る由もなかった。天然ともいえるこの彼の性質がもう少し察し良ければ、きつとレオンと距離を置くに違いない。

サイボーグ犬は、天使を、人間を愛していたのだから。

エバーグリーンメインルーム

「次元と歴史をとにかく変えないように、この時代とはできるだけ接触せずに任務にあたること」

ブラックはこんな注文を他メンバー4人に課した。

「それ無理でしょ」

シルバーは言葉やテレパシーに出さなかったが、不可能に近いとしか言いようがない。

ただブラックの場合いつものことだが、こう提言しても結果がそのとおり出るとは限らないので、「絶対とは言わない。ベストをつくしてほしい」と付け加える。

自分たちは言うなれば、今回の事件は極秘任務なのにもかかわらず、5人しかいない。

助けが必要となれば、向こうから来ることはあまり期待できそうも

ないのでさっさともとの次元と時代に逃げるしかなさそうだ。普段だと、なにかあれば、太陽系連合主席青薔薇だと軍を動かすとは思うが、今回の場合はそうするとますます歴史が変わるおそれがあるからだ。

「ナスカの街、見たかったなあ。緑色に光っててきれいだった」

レムリアーナに向かう途中、シルバーはメイnlームの片隅で他メンバーと交代でバラードと軽い食事をとりながら、不満をぶつけた。「おまえって、ホント、ガキ」

バラードはホットコーヒーとサンドイッチを食べながら、くすくす笑った。

「司令がなんでおまえを女性としてパートナーにえらんだか、わからない」

「ほつといてくれ」

アイスコーヒーとチーズケーキを食べながら、銀髪の少年はバラードの腰まで伸びた青い髪をさわった。

「いいなあ。僕もこういう色の髪に生まれたかった。もしこういう空色の髪と目だったら。」

「人生に、もし、はないって誰かが言ってたぜ。そういうありえない夢を見ない。だからガキなんだ」

「バラードは誰かパートナーはいないの？」

「いない。俺は女にはならない。多分男になるのを選びたい。だから今いないんだ」

「なんで？」

「うるさい。さっさと食べ。おまえだけには俺のことは絶対にわからない」

バラードはどこことなく機嫌が悪かった。腑に落ちなかったが、銀髪の少年はいつものごとくあまり深く考えもせず、このケーキおいしいとほづばっていた。

海底都市レムリア大陸Ⅱレムリアーナ

レムリア大陸は古代に沈んだとされる幻の大陸として地球では伝説として言い伝えられている。太平洋沖にあったとされるムーや大西洋沖に存在したとされるアトランティスとは大きく違う。古代セイロン島とも呼ばれる、インド洋沖に沈んだ、それも2億年3千年もの過去に存在したかもしれない大陸である。それは、地質年代の古生代に属するデボン紀から石炭紀つまり魚類時代から陸上のジタ植物時代に入り、両生類がやっと誕生し始めた頃である。

つまりアトランティス大陸が沈んだとされる1億2千年前とはかなりの開きがあり、とても同年代とはいえない。

次元軸がずれた場所に同時存在である、もう一つの地球が存在する。それが太陽系からもっとも近い恒星（4、5光年）アルファ・ケンタウリの第3惑星だった。

14000年前の過去に飛んだシルバー達一行は、その惑星の海底に沈む都市レムリアーナに向かっていた。

「歓迎されるとは思ってなかったがな、やっぱり」

ブラックが舷窓を覗き、顔を曇らせた。透視しているのか。

「この船目掛けて、宇宙船らしきものが1隻こちらに向かっている。それも反重力が使えるらしい。エバーグリーンをワープさせ、一旦、宇宙に逃れる」

「了解」

4人の声と同時にブラックは計器のスイッチの1つを押した。とにかく、トラブルをさげなければならない。できるだけ支障なく、反乱軍の天使たちを、未来に連れ帰らなければ、ならない。できれば、消去する道は避けたい。

だがー。

エバーグリーンは突然、明りを失った。暗闇に閉ざさがれた船内にすべての音は消え、彼ら5人は、背後に立つ、見覚えのある人物に声を失った。

「私を覚えていますか？ハイト司令？」

「、、、あなたは、死んだはずでは、、、」

「このとおり生きています。私はレッド・アーク。シルバーの父親です」

真紅の髪を肩までまつすぐに切りそろえた初老の男は微笑した。

その顔は年齢は違うが、若ければ、ブラックの恋人と瓜二つといえるかもしれない。

「8年前、あなたの乗った宇宙船は他の天使族たちもろとも忽然と消失した。あらゆるデータから存在が消失した記録が調査局にある」

それは、ブラックとその他太陽系連合政府関係者だけが知る事実であり、アーク博士の息子であるシルバーには知らされていなかった。なぜ、黙っていたの？」

硬直した傍らのほつそりとした銀髪の少年が、振り返り叫んだ。

緑色の双眸が燃え上がる怒りをあらわにする。

「すまない。俺が悪かった。それには訳がある。だが今は仕事 중이다。あとで必ず話すから」

「納得できないのは、黙っていた事実であり、あとで理由を聞いても無理です、ハイト司令。婚約は破棄します」

シルバーは婚約指輪を黙ってブラックの右手に差し出すと、無理やり掌に押し付け、姿を一瞬のうちに消した。

「気分屋が。あれだけ自分勝手に動くなといったらるうが。婚約破棄したくなるのは俺の方だ」

「あの子は？」

レッド・アークはレポートし、姿を消したシルバーが気になった。「おわかりになりませんか？バイオレットとあなたの子です」

「、、、あの子が？」

「そして今は私の大事なパートナーです。アーク博士、なぜ、あなたはここにいるのですか？反乱軍の天使たちの行方について知っていたら教えてほしいのです」

燃え上がるような赤い髪をした自分に似た男がいきなり現れ、父だといわれても実感はわからない。どちらにしても自分は7歳の日に捨てられたのだから。

ただ、太陽系連合の掟とはいえ、8年間も秘密にされた事実が面白くないのだ。実子の自分が知らないとは。そしてなぜか仕事柄とはいえ、パートナーは知っている。
だがー。

彼はブラックは謝っていた。すまない。俺が悪かったと。

僕たちは一心同体のはずじゃなかったのか。こんなことで切れる仲ではなかったはずだ。

もし生きているとわかれば、自分はラメールたちと合流し、今頃はブラックと敵対しているかもしれない。それを彼は懸念したのか？

(それだけはしたくない)

青薔薇あたりに脅迫されたたのかな。考えてみると自分はいままでデメリットばかりブラックに負わせている気がする。
後悔が渦巻いた。

「やっぱり、コクピットに帰ろう。あやまらなきゃ」

廊下をとぼとぼと歩きはじめた少年は、いきなり背後から肩をつかまれ、ガツンと頭を殴られたようなショックを受け、意識が遠のいた。

(誰?)

(これだけの衝撃波をつけても、失神しないとは。やはり噂通り) シルバーは息を呑んだ。ゆっくりと透視するとそこにあらわれた自分は自分と瓜二つだった。銀の髪、白い肌、そして夢見がちな大きなはつきりとしたエメラルドグリーンの瞳。

「君と同時存在のこちら側の世界の天使の一人。クリス」

「クリス？」

「それがフルネームだ。名字はない」

激しい頭痛に気を失いかけ、うずくまるシルバーを縄で縛り付け、

クリスは片手で肩にひょいとしゃいあげるとスタスタ歩き出した。

（まで。僕をおろせ。どこへつれていくつもりだ？）

はつきりと言葉に出したつもりが、遠のく意識のため実際は音声とならなかった。

（ラメール・ハイバーの国につれていく。海底都市レムリアーナに）

（レッド・アーク博士の許にいた天使とは君は違うのか？味方じゃないのか？）

（アーク博士はカラの道具だ。身体は残ったが意識は死んでいる）
なんだって？

気味の悪いこの自分に瓜二つの少年は、同時存在だという。この世に自分そっくりの人間はどこかに自分をいれて3人存在すると、以前、エスパー訓練校で誰かが言ってた。ではクリスはその中の一人？いや、次元と時代が違うから全くの別人？別の次元の、こうなりたいがならなかった、もう一人の自分なのか？

遠のく意識の中で、シルバーは背筋が凍りつくのを感じた。この世に自分は1人しかない。だとすれば、自分はこの後、ラメールたちには消されるのか？

エバーグリーンコンパートメントルーム1

（レオン、ちょっときてくれ）

（了解しました。どんな様）

メインルームで計器チェック中のレオンはブラックからのテレパシーに応じると、コンパートメントに直行した。

デスクに向かっていたブラックは振り返る。先ほどとはがらりと表情が変わっていた。

「たった今、シルバーが拉致されたようだ」

「何処に？」

「たぶん、レムリアーナだ」

普段、ポーカーフェイスのブラックらしからぬ、困惑した苦渋の整った美貌を目の前にして、レオンは複雑だった。

「だんなさま、私が単独でレムリアーナに向かいますでしょうか？」

「いや、俺も、皆も行く。おまえ1人では抑えることは不可能だ。」

「坊ちやまの、ちから、をですか？」

「、、、そうだ」

ブラックは自分の右手首の銀のブレスレットをかざした。きらりと光るプラチナ製のアクセサリーに近いそれには小さな瑠璃の鉱石が埋め込まれている。

「太陽系連合が開発した対エスパー用の能力封じのブレスレットで、エメラルドが組み込まれたあいつのブレスレットと対になって作動するような仕組みになっている。俺は護衛兼あいつの見張り役として、サイコブラスターのシルバーが8歳になる前に政府から派遣された。だが、たんなる見張り役で終わらず、あいつをパートナーとして選んでしまった」

「好きなのですね、坊ちやまが」

「まあ、そうなってしまったのは仕方がないな。あいつ以外は考えられない」

「坊ちやまもついこの間そのようなことをおっしゃられておられました。」

「あいつが？」

「けんかなさる前の日です。そのようなことはお二人はすでに婚約された夜、確かめ合っておられるのではと存じておりましたが。相思相愛ならお幸せなのではないですか？」

「あたりまえだ。、、、おまえ、それはどういう意味だ？あの夜は犬舎に戻ったはずじゃなかったのか？」

「だんな様。おっしゃっておられる意味が皆目不明です。解析できません。私はサイボーグ犬なのでわかりません」

はぐらかす犬機能を持つ眉目秀麗の金髪サイボーグを無視し、ブラ

ツクは事務的に命じた。

「このままレムリアーナに潜入する。エバーグリーン（飛行艇）は極小サイズに変成させ、姿を消して、龍宮にもぐりこむ。他のメンバーにも伝えるが、いいな？おまえはその後で、単独で潜入するんだ。あいつを探すんだ」

「わかりました」

地球ワシントンDC・太陽系連合機構

「まだ何も言ってこんな。あいつは。困ったものだ」

「どなたがです？主席？」

秘書のジャネット・リーが尋ねる。

背まで伸びた豊かなプラチナブロンドが美しい、碧眼の美女だ。

「わが、不肖の一人息子だ。海王星衛星トリトンに調査に出向いてからから全く連絡がこない。調査局は副局長のカーター・アダムスがなんとかまとめているそうだが。あいつはどこをほっつき歩いておるのやら。空間の歪みが冥王星付近にも現れて、一昨日も貨物輸送宇宙船が1隻行方不明だというのに。きちんと封鎖しとるんだろうな」

「その地点は現在封鎖されております」

「ブラックからの通信はどこにもキャッチされていないのか？」

「調査局長からの連絡はまだどの部署も受け取っておりません」

「さつさと調査を終わらせて、あとは本部のこちらにまかせるとあれほど言ったのに。勝手に天使族のペットと婚約までしおって。どら息子が。31にもなって困った奴だ」

貌のない男は青いケープの下で困惑した。身体全体をすっぽりとブルーのケープで覆い尽くす彼こそが、太陽系連合主席ロック・ハイト。

20年前、流刑地木星の独立戦争制圧の際、頭ごとミサイルで爆破

せれ吹き飛ばされたのだ。幸い脳自体に損傷はなく、残された身体に機械とともに埋め込まれている。

「理想ばかり求めおつて。馬鹿な奴だ。現実を見ておらん」

「でも御子息は優れた思索をされる方だと思えますわ。無理な冒険はなさらない。急いては事を仕損じるともいうじゃありませんか」

「ことわざでごまかすでない。とにかく、あいつとコンタクトをとつてくれ。サイボーグの」

「サイボーグ？」

「レオンハルトだ」

そう言うと、ロックは海王星が映し出されたスクリーンのスイッチを切った。

レムリアーナ・王宮中央コンピュータールーム

それは、初めて黒い軍用犬レオンとシルバーが出会った日のことだった。

フリスピーをなげると、40kgはあるうと思われる大型の黒いドールベルマンは金色の鬣をゆらしながら均整のとれたしなやかな動きで、飛び上がるとキャッチし、フルスピードでこちらに戻ってきた。

「利口だね、レオン」

シルバーはまだ7歳。駆け寄ってしっぽをふる犬の背を掌でなげると、ベルベットののような感触の毛並みが心地よく、茶色の温和な瞳がやさしくかわいい。

（私のことがお気に入りだなによりよろしかったです、坊ちやま）直に脳に送りこまれたテレパシーを受け取ったシルバーは、エメラルドグリーンの瞳を大きくし、「きみはテレパス？犬なのに」とレオンの貌を覗いた。

犬は硝子玉のように澄んだ眼をこちらにむけている。

犬は手なずけようとしても、だめだよ。むこうが主人だと認める

ようにならなければー

ハイト家の主人、ブラックが先ほどそう言い残し、仕事先のアステロイドベルト・ゼロ基地に黒塗りの私用宇宙艇Zで出かけて行った。「レオン、お手」

シルバーは右手を差し出した。レオンは座り、お手してやっているといわんばかりに、かがんだ子供の小さな手のひらに自分の大きな前足をここぞとばかりに押しつけた。

「わっ」

案の定バランスをくずしすっ転びそうになったシルバーは次の瞬間、誰かに抱きとめられた。

（えっ？誰？）

自分をかかえた人物が、金髪の眉目秀麗の若者と知り、シルバーは愕然とした。25歳くらいだろうか。ワインレッドのダークスーツが似合っている美青年だった。

「あなた誰？レオンは？」

茶色のさきほどの犬と同じ色の、やさしい瞳が笑った。

「私そのレオンでございます、シルバー坊ちやま」

「うそ。だってレオンは犬のはずじゃ、、、」

「私は犬の脳を持つサイボーグなのです。ハイト家の執事兼ボディガード兼召使をさせていただきます、レオンハルトでございます」

「犬の脳、、、？サイボーグ、、、？」

「そうです。人間型と犬型に使い分けて変身できます。犬型の時はテレパシーで意思疎通する戦闘型ロボットになり貴方様をお守りいたします」

「じゃ、きちんとお手して。ああいう危ないやりかたしないで。レオンハルト」

「呼び名はフルネームでなくレオンで結構でございます。私はあなたのしもべです。死ぬまであなたのしもべです。そのように、ブラック・ハイトーだんな様にことづけられました」

レオンはクスリと笑うと、困惑して大きな翡翠色の瞳を不安げに向ける、白くほつそりとした銀髪のたいそう美しい天使族の子の手を取り、握手した。

「うん。レオンよろしくね」

シルバーははじめて笑った。それはあどけなく見る者を引きつけずにはいられない純粋な天真爛漫な光を思わせた。

2人の出会いの記憶はここからはじまったと言えるのかもしれない。レムリアーナの宮殿は、一見エジプトのピラミッドに似た石造建築の要塞だが、海底とは思えないほど広々とした、透明の巨大ドーム内に都市ごとすっぽりとまくおさまっていた。

龍宮というにはあまりにも近代的なビル立ち並ぶ、未来都市さながらの街の姿に、ここが海底でなければ、3000年代 31世紀の未来都市と言ってもおかしくはないのかもしれない。

（我々の文明は栄滅を繰り返すのは3度目だときいたことがある。だとすれば、多少次元軸がずれていたとしても、この都市は最古の文明なのではないだろうか）

青藍色の宮殿内の迷路を歩き交う人々が見える。レオンは犬の姿で、レムリアーナの中央要塞に侵入し、気配を物陰からうかがっていた。王宮の中央コンピュータールームにはいりこむのにそう時間はかからなかった。見張りが4人ほどいたが、レーザービームで思考停止させている。ここを出たら、彼らの意識を戻し解除する予定だ。

（やはり古代だな。侵入者を察知するセンサーすらないのか）
たやすく入り込んだことに、不審だという気持ちもあるがレオンは主人シルバーのことの方が心配で、あまり深く考えもせず、進路を奥へと進めていった。

「人類をみな滅ぼすつもりなのか？君たちは」

天使族の組織の幹部10人に、対面させられたシルバーは、本音を明かした。

心を読むテレパスの彼らに、嘘を言っても、ごまかしがきかないからだ。

両手は能力封じのブレスレットの他に、新たな同じ効力を発揮する鎖できつく後ろ手に縛られ、椅子にくくりつけられている状態である。

ウエーブのかかった豊かな薔薇色の髪を背までたらし、同じ色の瞳を持つ白いドレス姿の少女が、自分の目を覗いて、口元だけの微笑を浮かべる。

「では、きみは、私たちの仲間にはならないと？」

他の9人も皆、髪と目の色を除けば、男も女も同じ貌に見えた。能面のように無表情なのだ。オレンジ色の灯りのもと。

10人はこのまま、こちら側に寝返って、味方になれと要求している。

「ぼくたちも人間なんだよ。ラメール。皆でうまく共存しあわないと宇宙は存続できない」

「シルバー、きみは、人間ではない。天使は人にあらずという太陽系連合の定めた法律を知らないとは言わせない。このまま、利用されて一生終わるのか？ ジュニアはきみ自身を望んでなんかいない。きみの特異な能力を利用したい。ただ、それだけなんだよ、シルバー」

「、、、うそだ」

「じゃあ、なぜ、きみを閉じ込めておく？ あの極寒の冥王星に。きみは自由なんかない生活をおくっていたじゃないか。いつも監視されて」

「監視？」

「ハイト氏にだよ」

「あれは監視じゃなくて愛されてるから、、、婚約、、、っ」

そこまでいいかけて、シルバーは左手の薬指を意識し、後悔した。そういえば、けんか別れして、返したままだ。

「婚約披露もカムフラージュだよ。きみを縛り付けておくための。」

人間のハイト氏が、きみを本当に欲するわけがない。実験体の我々を」

薔薇色の髪から青緑色のやさしい色に変化する、少女の髪と瞳にシルバーは、気づき、

「、、、ラメール、、、」

と目を見張った。

「僕と結婚しよう、シルバー。さっきのきみとおなじ貌の少年はきみのクローンなんだ。きみがきちんとした返事をしなければ、ハイト氏の船に侵入させて、破壊する。僕となら、きちんと子供も産めるし死ぬこともない。天使は天使同士しか子孫は残せないって、亡くなっただきみのお父さんもぼくの父も言っていた」

「、、、なんだって？」

シルバーの顔が紙よりも白くなった。

「死ぬってどういうことだ？」

「きみはハイト氏と結婚して子供を望んでも、無理だという意味だ。ぼくもそうだが、きみも同様、人間との婚姻はプログラムされていない。万が一子孫を妊娠してもすぐだめになるか、出産までこぎつけたとしても母体ごと確実に死ぬ。そういうために造られている。連合政府（太陽系連合）は知らないけどね」

「、、、うそだっ！」

愕然とするシルバーにラメールは近づき、両手でその顔を覆うと唇を合わせた。

（だから僕といっしょになろう、シルバー。僕らはそういう運命だったんだよ、きつと）

あらがえずなすがままの囚われの身の銀の髪の天使は、椅子から鎖をはずされ、床に押し倒された。

まわりの天使数人に抑えつけられ、精神誘導剤を打たれたシルバーは、そのまま気が遠くなり、意識を失った。

どれぐらい時間が行き過ぎただろうか。気がつくとも全身の苦痛はい

つものまにかなくなっていた。誰かに抱き寄せられている。目を覚ますと、見慣れた懐かしい顔が見えた。

「ブラック？」

「おまえの苦痛はガード（遮断）した。沈痛剤を打ったから、これからきいてくるはずだ。大丈夫か？ やつらにずいぶんひどいめにあわされているが、」

シルバーはラメールに抵抗し戦った際、両手両足を骨折していた。抱き寄せられてまわりを見渡すと、ラメールも他の天使たちもいない。

「やつら俺が攻撃すると、逃げ去った」

「来てくれたんだ。助けにきてくれてありがとう。ブラック」

「あたりまえだ。おまえは俺のただ1人のパートナーだろうが」

「、、、ごめん。勝手な行動して」

「いやおまえの父のことを黙っててすまなかった」

「そういうとブラックは真摯な目を向けた。

「おまえが去っていくと思っ言えなかった」

「去っていく？」

「太陽系連合の極秘事項を明かすこともできないのも事実だが、殆ど見込みのない計画を装って、博士と失敗した天使たちを処分した事実を、どうしても言えなかった。聞いたらきつとおまえは俺から離れて行くだろう。そう思った」

「そうだったのか。でも今はなんとも思ってないよ。そんなこと」

「無事でよかった」

ブラックがだきよせたまま、唇を重ね合わせる。先に侵入し、シルバーの居所を突き止めたレオンと途中交替したブラックが、メイン要塞の指令室に入った時、床に転がっていた能力封じのプレスレットが目についた。

「これをつけてくれ。つけないと僕はあなたにも何をするかわからない」

「そんなもの俺たちに必要ない。おまえを信じているからな。だが、

俺たちのおそろいのアクセサリーだから、やはりつけよう」

傷ついて倒れたシルバーが懇願するとすばやく左手首にブレスレットをつけてやり、両手両足が骨折し、横たわる彼にすばやく手当をはじめた。

「応急措置だ。あとは船内で俺が治す。ここですると、俺が気分悪くなる困るからな」

「けんか中だけど、許してくれる？」

「ばかだな。愛してるよ」と言い口づけると、「これを」と、黒髪的美青年は少年の左手薬指にプラチナリングをつけた。

「こんなに大切に思っているのに。もう2度と外すな。俺たちは将来、結婚するんだぞ。」

「結婚、、、」

そう言った瞬間、少年のこめかみから流れ出る涙をブラックは見つめた。シルバーは声もなく泣いていた。

「どうして泣く？」

かぶりを振り、銀髪の天使は、ただ、

「うれしいから。あなただけを愛している」とだけ答えた。

そうして声もなく泣き続けるのだった。

少しして意識を失い眠った天使を背負ったまま、ブラックはレオンと連絡を取り、宇宙船へと向かった。そのときだった。ラメールたちが去り際に爆破したレムリアーナの要塞が崩れ落ちたのだ。無数のスパークした火花が、亀裂が床と天井に入り、はるか下方眼下の海へと落ち、消えていく。その破壊力とはとどまることを知らなかった。

「あいつら、、、歴史を変えるつもりか？もうゆるせん」

ブラックは鎮痛剤が効き気を失ったシルバーを背負ったまま、その合間をレポートし、母船エバーグリーンへと向かった。

エバーグリーン艦内中央指令室

「どら息子はどうした？何の連絡もないのはどういうことだ？常に現状を報告するように伝えろ。それからおまえはまだ記憶がもどらんのか、レオンハルト大尉」

「申し訳ございません。今レムリアーナに潜入し、エバーグリーンで逃げた反乱軍の天使たちを追っています。記憶は、まだございません」

船内通信に入った主席ロック・ハイトの映像は怒り心頭していた。

「おまえが人間だったころの記憶を早く呼び戻せ。どれだけわしを待たせたら気がすむのだ？」

3か月ほど前に主席に突然呼ばれて、「軍にもどらないか？」と打診された。

「かわりのロボットをおまえのかわりに執事としてハイト家に置くことにした」

「なぜですか」

「おまえとペットの間に間違いがおこっては困るからだ」

「間違いとは？」

「うちのどら息子が、ひきとったペットとどうも所帯を持ちたいらしい」

「、、、そうでございますか」(やはり、、、)

「本人に直接聞いたわけではないのだが、金星研の朝霞博士が受け、わしに相談してきた」

「間違いとはどういう意味でしょう、閣下」

「実はおまえは犬ではなく、もと、人間のサイボーグなのだよ。レオンハルト大尉」

「、、、おっしゃる意味がわかりません！閣下」

「本当に君にはすまないことをしたとわしも思う。きみは手違いで脳を入れ替えられた欠陥品のサイボーグだったのだが、生前、あまりに優秀だったのでわしのどら息子の世話人として仕えてもらって

いたのだ。犬機能暗示を施した後に」

（わたしが人間、、、?!）

レオンの中でなにかが大きく崩れ落ちていく。自分の守っていた最後の砦が、大きく崩壊するのを彼は感じていた。

（私はあなたをしあわせにすることはできない。サイボーグである私に、あなたと子を成すことはできないからだ）

レオンは心に最愛の人の姿を思い浮かべながら願った。

（だが、あなたには宇宙一幸せになってほしい）

エバーグリーンコンパートメントルーム1

両手、両足の骨折は、エンバスのブラックにより、治療を施されたばかりだった。施した側の彼の顔色は、シルバーが心配するほど悪かった。

だがー。

「なにか、変だな」

ブラックが、訝しみ呟く。

「なに？」

「地面の奥になにか、いるぞ」

エバーグリーン艦内中央指令室

なにかがおかしい。

デインは船内に侵入者がいるのに気付き、「おい」と脇に立つバリードをこづいた。

「誰がいるぞ。入ってきている」

「どこに？」

いきなり船内が大きくゆれる。

「こここの地下だな」

「地下？」

「地中だよ」

「掘るか？」

「もぐるしかないんだろうなあ」

ディーンは侵入者を探すべく、パネルを操作する。

「宇宙船が浮上するぞ」

いつのまにか背後に立つ青年がディーンの操作する手を制した。

「司令」

「地下から上ってくる。ワープして位置転換しよう」

彼は左横からパネルを奪うと左手でまるで鍵盤を弾くかのごとく操作し、船を宇宙へと飛ばした。

暗黒の空が頭上の舷窓に広がる。

「彼らの宇宙船ですか？」

「そうだ。連合軍から盗んだものらしい。我々の船を破壊するつもりだ」

背後にいつのまにか銀髪の天使が佇んでいる。

「おや、もう大丈夫なんでか？坊ちやま」

金髪のレオンが操縦席から振り返る。

「坊ちやまだと？」

空色の長い髪をふりはらうと、アーモンド型のセルリアンブルーの双眸を怪訝にむけるバラード。

「おまえ、いつ男になったんだ？シルバー」

「僕はまだ男でも女でもないよ、バラード」

「坊ちやまは私のつけた愛称です。不良のあなたがたにはおわかりになれない世界ですが」

「けんかはやめよう。宇宙にでたよ、ほら」

シルバーの綺麗な透明の湖畔のような、翡翠色の大きな瞳に、おやつ？とバラードは目を見張る。

なにか違うな。いつもの、奴と。

身体の内秘めるものどこかが、なにかが、今までの親友と違シルバーう

ものに変えていた。

「レムリアーナは沈んだ。海底に多くの民と共に。ラメールとその仲間の天使たちが、地殻に変動を人工的に起こさせて、沈めたんだ」
「なぜそんなことを」

いぶかしむディーンにシルバーは頭を振る。

「僕にもわからない。ただ、彼はこの宇宙の未来に変革を求めるために過去を沈めにきた。ナスカに行つて、僕のクローンを使い、支配してから破壊するつもりだ」

エバーグリーン号は方向を転換せず、まっすぐに美しい緑の人工都市「ナスカ」へと進路をむけたのだった。

「なぜ父を殺した？」

「我々を消そうとしたから」

「消そうと？」

ブレスレットをはずすと、ラメールに即座にダメージを与えたが、自らも打撃され、倒れている間に相手も疾走した。

ラメールはシルバーの父、レッド・アーク博士を殺害し、他の天使族を使つて誘導していた。つまり博士の身体は中身がカラだった。

なんとかしてラメールを説得しなければ。ラメールの気持ちはよくわかる。だが、何かを破壊してまた何かを造るといふくりかえしは無駄だ。過去が消えれば、未来もとうぜんなくなる。そのことについては彼らを説得する手段があるのか。

「ラメールを救わなければ。仲間の天使たちも」

「おまえどっか変わった？」

空色の髪の子友バードは傍で佇む銀の髪の美少年のなにかの変化を感じ取り複雑な面持ちでいた。

ナスカ上空

層気楼が砂漠の向こう側に現れる。ゆらめく風がその景色を切り裂き、クリスタルなエメラルドの都を映し出した。

螺旋形の無数の美しい建造物が目の前に現れる。美しく透き通るガラス細工のようなそれでいて強靱な翡翠色の都市。

「あそこに」

バラードが砂漠の向こう側に広がる海、水平線の彼方を指さした。

「空の切れ目が見えないか？」

「えっ？」

シルバーが目をこらすとそこに見えたものは。

空間がつながっている。もうひとつの世界と。

「あれは沈んだはずの龍宮じゃないか。レムリアーナの」

セルリアンブルーの空のあなたに、つい先だってラメールたちが人工的におこした地殻変動で沈められた、都市が見えた。ナスカのエメラルドグリーンの都の真上に。

「どうする？どっちの方にいるのかな、彼らは」

亜空間ワープの扉をアレン・ハイバー博士はここにつくり、もとの世界からきたのかもしれない。時間の流れも同時にさかのぼって。

「奥の手を使うか」

ブラックが舷窓から空を見上げて低く呟いた。

「奥の手？」

シルバーが訝しんだ。

「軍を動かす」

「軍？」

「軍を動かしてあいつらを鉢合わせにする。来た側の次元にある龍宮から行き、太陽系連合の艦隊を呼ぶ。こちらの艦も大きくして、両者で鉢合わせにして彼らを身動きできなくする。そこで交渉に持つていく」

「交渉？」

「武力をもって制せず、まず、言葉で落ち着かせる。交渉にはそれ

から入る」

ブラックはそこで一息つくくと、4人に厳かに宣言した。

「彼らに人権を与える」

「人権」

「おまえも俺と結婚しても大手が振れるようになる。みな共存しあえる社会にするんだ」

西暦3086年7月地球への帰路

エバーグリーン・コンパートメントルーム1

二人の目の前に、外へ繋がる舷窓がある。

暗黒の宇宙空間に無数の星々の煌めきの向こう側に向こう側に向こう側に小惑星帯が広がっていた。これから、地球に帰るのだ。

事後報告を終えた後、冥王星に帰宅する予定だった。

長い口づけの後、男は抱きしめた少年の目を覗いた。

「おまえ何かあったのか？」

「何って、、？」

「俺に黙っていることあるだろう。隠すな」

「別になにもないよ」

「空気の色でわかるんだ。おまえはすぐ顔に出るんだよ。結局は2人しかいないんだから、口に出して言わなきゃだめだろ？会話がなくなったらそれで終わりなんだから。なにかあったら話、しろよ」
そこでシルバーは先だつてのラメールとの一部始終をブラックに告げた。

「無理して変わる必要はない。そのままのおまえでいいんだ。それなりでいいんだよ」

「うん」

「それに、なぜ、まだ起こってもいないことを心配する？」

「そつだね」

少年は、男に縋りつくくと、「でも、怖いよ」とつぶやいた。

「おまえになにがあっても俺が守ってやる。とにかくやってみろ。死にそうになってもエンバスの俺が救うから。なにもしないうちに希望を捨てるんじゃない」

地球に向かう薄暗い艦内。

天使は、瑠璃色の宇宙を見つめていた。

「これから、俺たちは結婚するんだよ。幸せになろう、シルバー」
夜の海のごとく深い声で男が呟くのを、抱きしめられたその胸の中で、波の鼓動と共に聴いたのだった。

西暦3087年4月某日太陽系連合調査局地球支局内ロビー喫茶室

「PlatinumRose」

「あのときは本当にすみませんでした」

「いえ、あなたは悪くないわ。誰も悪い人はいない」

淡いキヤメルのテーブルに白いコーヒーが二つ並んで置かれていた。中央にシガレット型のクッキーが、銀の皿に盛られてある。

穏やかな午後の日差しが白いレースのカーテン越しに差し込んでくる。

ドビュッシーのピアノ曲「アラベスク」が流れていた。

「ハイト氏と、きみには大変感謝している。シルバー。僕たち天使たちは実験体でなく、一個人として扱われるように太陽系連合に認められた。僕は金星の朝霞博士の科学研究所に、来週から呼ばれてそこで働くことになったんだよ」

大きく胸元の開いたレモンイエローのワンピースドレスを着たプラチナブロンドの少女に、背に伸びた長い青緑の髪を1つに束ねた、白いスーツ姿の青年がほほ笑んだ。その瞳は深い海底の色、、、失

った海の色をしていた。2238年某国同士の核戦争により、地球の海は実質的に失われた。今現在の海は2800年代に人工的に造られた偽物の海なのだ。

「すてきなバストだね。女性になった君はとてもきれいだ。ハイト氏と6月に結婚するんだってね。おめでとー」

「ありがとう、ラメール」

淡いレモンのドレスから見える女性の白い胸元は、とても大きく豊かだった。彼女の透き通ったエメラルドグリーンの双眸はとても嬉しそうだった。美しくなると、青年は少なからず驚いていた。もともと綺麗な娘だったが、女性に変化した後の今の少女は、太陽のごとく輝いて見える。

「先月から身体が変化しはじめたの。女性になることが、こんなに素晴らしいことだなんて知らなかった。私ね、ラメール」
そう言うと、彼女はクスクスと笑った。

「あの人にお願ひしたの。もう煙草は吸わないでねって」
「ヘビースモーカーの彼に？どうして？」

「もうひとり家族が増えたときのために、よ」
ああそうか、と青年は目の前の、透き通った銀の髪の少女のぬけるように白い頬の、ほんのりと紅にそめた微笑をみつめた。

「、、、、そういえば、改名されたのでしたね、シルビアさん」

西暦3087・6月7日 地球

抜けるような碧空が、頭上に拡がっていた。

その青のむこうがわに点のように煌めく緑色の光が消えるのを、確認すると、二人は、手すりにもたれた身体を返し、それに背持たれた。

風が初夏になる。これから春を通り抜け、夏がライム色に染まる風をつれてくる。木々の薫りがその訪れを告げようとしていた。

「これから二人で新婚旅行か。エバーグリーンで。あーあ、いつちまったなあ。シルバー、、、」

空色の髪を、腰までストレートに垂らしたジーンズにTシャツの姿の若者が、ためいきをつく。

「未練、、、があるのではないですか？坊ちゃまに」

ワインレッドのスーツを着こなす金色のやわらかなウエーブのかかった髪。琥珀の瞳の美青年が脇で微笑んだ。

「未練だと？俺はおまえじゃねえよ。執事のくせに、あの二人についてかなくて、よく。我慢できたな。未練がましいのは、おまえの方だろ？」

「、、、私が？あるわけがないでしょう。私は、犬ですよ。人間には興味ありません」

碧空の彼方に消えた宇宙船は公的な太陽系内遊覧観光用豪華客船として生まれ変わり、その収益は宇宙全体のものとして還元活用されることとなった。容易に多くの人々が利用できるようにと、価格も割高ではない。シルバーとブラックは結婚式を地球の教会で挙げた後、この宇宙船で一般の他の客に混じって、新婚旅行に出かけて行った。勿論、ある程度、変装して、だが。

「犬だと？」

バラードの大きなアーモンド型のブルートパーズ（青玉）の瞳が、うそだと睨んでいる。

「犬はさ、嘘ついたりはしないもんだ。ほんと、うそつきだな、おまえって」

「、、、なんだって？」

「うそつきな、犬だな、おまえは」

そう言うと、バラードは「これから、店でバイトだから」と、櫛の並木道を走り去っていった。

「うそつきな、犬、か」

レオンは金色の豊かな髪を風になびかせながら、緑の木々の石畳を歩いた。どこからか流れてくる音楽が夏の空気にとけこんでいく。

それは「COSMOS」コスモス（宇宙）という幻のロックバンド
が歌う「瑠璃色の宇宙」という歌だった。

了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8284y/>

瑠璃色の宇宙（そら）

2011年11月24日18時45分発行